

桜美林大学における外国語教育 — 将来構想

基盤教育院 外国語教育ディパートメント長 齋藤 伸子

「桜美林の外国語教育」の将来構想については、基盤教育院外国語教育ディパートメント将来構想委員会が中心となって検討している。以下、外国語教育ディパートメントおよび基盤教育院の会議で共有されている構想について述べる。

1. 将来構想の基本方針と背景

まず実現したいのは、「桜美林の外国語教育」を、ひとつのコンセプトのもとに統一された基本方針、総合目標を持つ、まとまりのあるプログラムとして運用することである。共通のコンセプトとしては、以下のキーワード、キーフレーズが挙げられている。

- 桜美林から世界へ
- 世界から桜美林へ
- 多言語・多文化に生きる人々と出会う
- 多言語・多文化の中の自分に出会う
- 桜美林で世界と出会う
- 桜美林で、将来の国際ビジネス・パートナーと出会う

内容面では、世界の言語教育の流れを意識し、「外国語の桜美林」ならではの、先進的な言語教育の考え方を取り入れた教育を実施し、対外的にもアピールしていく。

現在、世界の言語教育は、「言語学習の目的は知識の蓄積を目指すことではなく、学習者がそれぞれ異なった場面で特定の相手に対して、さまざまな能力を使い分けて効果的なコミュニケーションを行うこと」にあるという考え方にパラダイムシフトしている。評価方法は、知識量からの推測に基づく能力評価から、その言語を使って実際に何ができるかを直接的に測るパフォーマンス評価、あるいは学習プロセスの評価へと移っている。EUでは複言語主義(plurilingualism)のもと、欧州評議会により能力記述文(Can-do statements)からなるヨーロッパ共通言語参照枠(Common European Framework of Reference for Languages、以下CEFR)が設定され、ヨーロッパ言語ポートフォリオ(European Language Portfolio、以下ELP)を使った学習段階の評価が行われている。日本においては、

外国語としての日本語について、国際交流基金が Can-do statements 「JF 日本語教育スタンダード¹」を作成し、全世界で 60 万人以上が受験する公的試験「日本語能力試験」も、2010 年度より課題遂行能力を重視する内容に改定された。もはや、数値化できる結果だけで学習成果を表わそうとすることは、時代に逆行する考え方だといえる。

しかし、新しいパラダイムを基にした言語教育の考え方は、知識を軽視することにはつながらない。知識を着実に積み上げ自分のものにしてこそ、円滑で持続性のあるコミュニケーションが実現できることはいうまでもない。外国語教育部門では、直接的な言語使用と知識量の充実の両面を重視し、例えば、学習段階を評価する「能力記述文 (Can-do statements)」と知識量を測る公的試験とを組み合わせることによって、学習面と知識面の両面から学習を支援していく。

外国語教育部門における外国語プログラム全体として、将来構想に向けた 4 つの指針と、具体的な 2 つの達成目標が挙げられている。

<将来に向けての指針>

- 人と人との交流を重視した学習環境づくり
- 「できるようになる」ためのプログラム
- 自律的に学習できることを目指したプログラム
- 生の多様な背景とニーズに応えるプログラム

<外国語プログラムの達成目標>

- 大学で学んだ外国語を使い、自分の意思を伝えることに自信を持てるようになる。
- さらに高いレベルの外国語運用力を身につけるための基礎となる知識やスキル、学習ストラテジーを身につける。

これらの基本方針の下、以下で述べる「桜美林言語パスポート」構想が進んでいる。

2. 「桜美林言語パスポート」

「桜美林言語パスポート」(以下、「言語パスポート」)とは、自分がその言語を使って体験したことや学習の記録を書き込むための冊子である。将来は、学生が 1 人 1 冊これを持ち、4 年間をとおして使い、就職活動でもこれを見せて自分の力をアピールすることが

できるようになることを目指す。

言語パスポートに書きこむ内容は、その言語を使ってできるようになりたい到達目標、その言語を使って実際に「したこと（「Did）」、「できること（「Can-do）」、公的試験の点数や達成レベル、獲得した資格、履修した科目の記録などである。学習プロセスを可視化することにより学生の動機づけを高めることが、言語パスポート導入の目的である。

学生は、到達目標に向けて計画的に学習を進めつつ、学内外で言語を使用して「Did」を増やしていく。その内容は、たとえば学習している外国語を母語とする留学生に挨拶を試してみる、会話をしてみること、インターネットで情報を検索すること、その国の映画やYouTubeの映像を見ることなど、どのようなものでもかまわない。周囲にその国の出身者がいなくても、情報化の進んだ現在では、様々な方法で「Did」を増やすことができるはずである。その言語を使える方法を積極的に考えることで学習リソースが増えれば、個人にとっての言語学習環境はよりよいものになり、その言語を使う楽しみも増える。また、公的試験や資格、履修した科目の記録は、言語パスポートに書き込むことによって学習者が常に意識して振り返ることになり、その後の計画的な履修や学習につながっていくであろう。

3. 今後の課題

言語パスポートの運用にあたっては、いくつかの課題がある。

まず、言語使用や学習プロセスの評価は成果が数値で見えないことが困難な点である。数値によらない評価基準として、前述のCEFRやJF日本語スタンダードが知られているが、桜美林大学においては、桜美林の学生の環境に合ったオリジナルのCan-do statements「桜美林 Language Portfolio」を構築したい。「桜美林 Language Portfolio」は言語パスポートにも記載して、学生が到達目標を設定したり自己評価を行ったりするときに使えるようにするほか、外国語教育部門全体で、シラバスに「桜美林 Language Portfolio」を使った到達目標を明記し、学生が履修科目選択の際に参考にできるようにすることも検討していきたい。

つぎに、記録の信頼性の問題が挙げられる。言語パスポートに記録する内容は学生の自己申告に基づくが、「Can-do」の信頼性を上げるには、確実にできるようになったことを認定するシステムが必要である。ELP（CEFR）においては、達成レベルの認定のために、できることを示す「証拠」を添付することになっているが、言語パスポートにおいても「証拠」を見せることや、その「証拠」に基づいて「Can-do」を認定する専門家の役割につ

いて検討することが必要となるであろう。

さらに、言語パスポートを作っただけでは学習の活性化には結びつかない。学習促進のためには、言語学習に向けての環境整備が必要である。そして、学習の継続のためには、学生が個々の目的に応じた適切な学習方法や学習リソースを選べるように、言語教育の専門家の立場からアドバイスができる「言語学習アドバイザー」が必要である。また、学習リソースを提供する「外国語リソースセンター」の開設、言語を実際に使用できる機会の提供、外国語に触れ学習動機を高めるイベントの開催、外国語担当教員同士の情報交換や教員研修、外国語以外の科目の担当教員との連携など、様々なことを進めていくことが望まれる。学生の作文やスピーチなど授業の成果物のオンライン公開も動機付けを高めるのに役立つであろう。(英語と日本語ではすでに行われている。

英語⇒ <http://elpweb.com/onjapan/>

日本語⇒ http://www7.obirin.ac.jp/nihongo/campuslife/ja_class.html

以上、外国語教育デパートメントの将来構想と課題について、「桜美林言語パスポート」を中心として述べてきたが、他にも、外国語科目の抽選の問題、言語ごとのレベルの設定、必修外国語の見直しなど、外国語教育デパートメントが取り組むべき課題は多い。方策を打ち立て環境整備を進めるのは簡単なことではないが、ハードとソフトの両面から言語学習のプロセスを支援し言語の使用機会を増やすことが、学習成果の向上につながると考えている。よりよい言語学習環境の整備と将来構想の実現に向けて、今後も努力を続けていきたい。

注

¹ JF は Japan Foundation の略。現在、一部完成して公開している。